別紙２

審査の結果の要旨

論文提出者氏名　寺尾隆吉

本論文はラテンアメリカ 20 世紀前半を特徴づける革命、内戦、独裁政権による政治的暴力を背景にして書かれた小説を、暴力小説と名付け、その分析を通して、小説というジャンルが暴力小説の出現によってどのように変化してきたかを論じたものである。

具体的には、1910 年に起こったメキシコ革命を題材にした「メキシコ革命小説」、1948 年にはじまるコロンビア内戦を扱った「コロンビア暴力小説」、1948 年のクーデター以降ベネズエラを恐怖政治下においた軍事独裁制、およびそれに続く都市ゲリラを告発した「ベネズエラ暴力小説」の三つの小説群が本論文の対象である。この三つのグループからそれぞれ三つの小説を取りあげ、合計九つの作品を比較検討することによって、20 世紀ラテンアメリカにおいて小説の書かれ方がどのように成熟していったか、またこの三地域のあいだにはどのような差異が見られるかを解明した。

本論文は、序章、五章からなる本論、および結論から構成されている。

まず「序章」では、これまでのラテンアメリカ文学史を検討し、それらが作品の概要と作品の印象を並べるだけのものであり、小説の構造的変化を捉えていないこと、またラテンアメリカの地域ごとの違いを説明できていないことを指摘する。ピエール・ブルデューの「文学場」という概念を援用しつつ、社会における小説家の自律性が高まると小説の書き方も変化するという見地から、小説家が現実とどう対峙し、歴史的事件をどう小説化するのかに注目してラテンアメリカの文学史をみなおすという本論文の意義を説明する。

「第一章　20 世紀ラテンアメリカ小説家たちが置かれた状況」では、まず 19 世紀末以降、小説がナショナリズムに従属し、政治や教育の道具にすぎない作品が多く書かれた状況を分析する。そのなかで 1940 年代メキシコではじまった変化に注目し、小説が政治とジャーナリズムから自立していった経緯、「ブームの時代」と呼ばれる 60 年代にかけて、その自律性が他の国々に波及していった状況を検討する。

「第二章　小説の変遷を分析するための理論的問題」では、第三章から第五章で具体的な小説の分析をするために必要な理論的問題をいくつか取りあげる。真実とフィクションの関係、小説における時空間の扱い方、シンボルを使った探求小説の登場、実験小説のテクニックについてここでは検討する。

「第三章　革命とメキシコ小説」では、革命小説の出発点であるマリアノ・アスエラの『虐げられし人々』（1915）、メキシコにおける新しい小説の先駆となったホセ・レブエルタスの『人間の喪』（1943）、実験的手法を駆使し、メキシコ人のアイデンティティを問うた革命小説の集大成であるカルロス・フエンテス『アルテミオ・クルスの死』（1962）を分析する。

「第四章　コロンビアにおける暴力小説」では、メキシコ革命小説のブームから 20 年後に、コロンビアで、メキシコ革命小説の盛衰とほぼ同じ経緯をたどった暴力小説群を扱う。そのなかでもコロンビア暴力小説の原点となったダニエル・カイセード『空っ風』（1953）、残虐な描写の多い小説への批判から生まれたガブリエル・ガルシア・マルケス『大佐に手紙は来ない』（1957）、暴力の起源を問うたグスタボ・アルバレス・ガルデアサバル『コンドルは毎日埋葬されない』（1972）の三冊が具体的分析の対象となる。

「第五章　ベネズエラにおける暴力小説」では、60 年代のラテンアメリカ文学の「ブーム」の時期に発表された暴力小説に目を向ける。ルポルタージュ風フィクションのミゲル・オテロ・シルバの『オノリオの死』（1963）、ノン・フィクション形式で、拷問や投獄生活を生々しく描いたホセ・ビセンテ・アブレウ『国家公安部隊』（1964）、ゴンサレス・レオンの都市ゲリラを扱った実験小説『携帯国家』（1968）の三つの小説が分析の俎上にのせられる。

「結論」では、社会・文化状況の変化と連動する文学の自律度にしたがって、小説の歴史的変遷過程は国ごとにある程度の相違が存在することを、三章から五章にかけて扱った三つの国のケースを挙げて立証する。その過程のなかで政治暴力を扱う小説が小説全体の発展、成熟に大きな役割を果たしたことを結論づける。

本論文は研究対象とするメキシコ、コロンビア、ベネズエラにそれぞれ長期滞在し、現地での調査を綿密に行った上での文学研究であり、達意のスペイン語で書かれている点は特筆に値する。

本論文の画期的な貢献は、二つの点に要約することができよう。一つは、具体的に論じられる九作品だけでなく、メキシコ、コロンビア、ベネズエラで 20 世紀に書かれた数多くの暴力小説を読み込んだ上で、これら三国の文学における暴力小説の性格の違いを明らかにしたことである。二つめは、従来のラテンアメリカ文学史がデータの羅列に終始する百科事典的性格のものであるという批判から、社会との関わりのなかで小説がどのように自らの領分の自律性を確立していったかを、抽象論に陥ることなく、具体的なデータおよび綿密なテキスト分析に基づいて解明したうえで、小説の歴史的変遷の理論化を試みたことである。

このように本論文は、メキシコ、コロンビア、ベネズエラの 20 世紀小説史、および

ラテンアメリカ現代文学史の研究に新しい視座を提供する傑出した研究である。

審査では以下の弱点、問題点が指摘された。1）従来の文学理論への批判的議論が十分に行われていない。2）文学批評用語の使い方に若干の混乱、もしくは曖昧な点が見られた。3）小説は時代とともに発展・進化するという素朴な小説発展論が議論の前提となっていることに疑義がはさまれた。4）論証の過程で、さまざまに発展する可能性をもった興味深い見解が示唆されているにもかかわらず、結論を明快にまとめすぎた。

しかしながら、審査委員会は、こうした弱点は本論文の従来の研究史に対する画期的な貢献を否定するものではなく、本論文は博士論文として必要な水準を十分に達成しているものと判断した。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。